

〔論文〕

行動の社会化と共同性の発達

木 村 光 伸

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

ニホンザルの自然社会における個体間関係を考える手がかりとして高崎山に生息する群れを短期間観察し、その生活の中に垣間見える社会性の獲得と共同性の発達について議論した。ニホンザルにとっての社会性とは、種のいかに問わず、個体の発達過程と密接に関係する性質であり、その意味において社会性は個性性の別の側面であるといえる。ニホンザルの場合には個体は集団の中で成長・成熟するのであるから、他者との日常的な関係性が社会性を発達させる。それは同時に複数個体間の相互的な関係の形成を通して共同性を構成していく過程でもある。動物研究で比較的安易に、あるいは無定義に語られる社会概念が、共同性という種社会の統合の基本原則との関連抜きでは論じられないということを主張した。

キーワード：ニホンザル，社会性，共同性，発達

The role of ontogenetic development and its social relations of Japanese monkeys

Koshin KIMURA

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

本稿は2016年度名古屋学院大学研究奨励金の補助を受けて行われた調査研究の成果の一部である。

発行日 2018年7月31日

はじめに—生態学からの飛翔—

1970年、宮城県・幸島における餌付けされた野生群の調査から始まった私のニホンザル観察研究は、その翌年から、(財)日本モンキーセンター専任研究員(後に東京農工大学助教授)であった水原洋城に随行して訪問した高崎山の巨大化した餌付け群に出会って、サルの群れという概念そのものやそれまでに記述されてきた整然とした社会構造という観念に疑問を抱くことを当初から包含して出発した。餌場(高崎山では寄せ場という)を呆然と見つめることで、「サルの群れとは何か」という課題を見出し、その後現在に至るまでの研究テーマのひとつとして考え続ける契機となった。その後、同じく日本モンキーセンター専任研究員であった伊沢紘生(後に宮城教育大学教授)の指導の下で、白山蛇谷の豪雪地帯に生息する複数の群れ、さらには下北半島における世界最北限のサルたち、宮城県牡鹿半島の先端に位置する金華山島のサルなどの生態調査に従事し、さらには京都嵐山にあった岩田山自然遊園地で餌付けされ、餌場と自然の森とを行き来する群れを観察し、自然教育の教材化を考えるという立場を与えられるなど、先人たちが想像を絶する努力の末に開拓した多くのフィールドで、純野生状態のサルから、過度に人間の干渉が影響を与えていると思われる群れまで、いくつもの異なった社会的背景を持つ集団で行動研究の素材に触れ、また多様な研究方法に接する機会を得ることが出来た。日本モンキーセンター発行の「モンキー」誌に掲載された『白山のニホンザル』(1973)はニホンザルに関する私の最初の報文であるが、そこでは厳冬期に7-8mにも達する豪雪の中で生きるサルたちが冬を越すことの困難さとそれでも雪崩頻発地(樹木が成長を阻まれ、高茎草原化している急斜面)を冬越しの資源採取地としつつ、老齢個体やあかんぼうに少なからぬ犠牲を出しながらも越年し、春にはまた出産の季節を迎える様子を描き出した。また、世界最北限の霊長類として有名な下北半島のサルに関して、群れの個体数の成長曲線を定義づけし、森林の環境容量と個体群の成長の限界を想起する資料を提供(木村, 1978)出来たことは、当時の地球環境問題の基本原則として問題となりつつあったローマクラブ報告『成長の限界』(1972)とも関係した基礎的資料としての意味ある現地報告となったと自負するものである。幸島での調査研究は、もともと学部生として所属していた森林生態学研究室(四手井綱英教授)で、森林を構成する生物の多様性とその生態系における物質循環の研究(国際生物学事業IBP)という大テーマの一部として、当時の荻野和彦講師(後に愛媛大学教授)の下で行われ、設立間もない京都大学霊長類研究所の課題でもあった幸島ニホンザル群の自然状況の維持・回復というテーマとも合致したので、林学分野の一学部学生にすぎない私の報告(木村, 荻野, 1972)がちょっとした評判になったりもした。このような私の研究態度は後にコロンビア・アマゾンにおける広鼻猿類の調査へと転進した後もサル-植物群システムの構造分析の手法として、現在まで持続しているものである。

このように、私自身の研究の関心は主として生態学的、とりわけ生物集団としてのサルの群れとそれを取り巻く自然環境としての森林という対比の中で、時には群集生態学や生物経済学として、あるいは個体群生態学としてすすめられたのであるが、当時はまだ、そのような研究対象の理解と研究方法の延長上に、行動学的視野が開けるという予想は全くなかったと言ってよいだろう。ちょうどローレンツら3人の動物行動学者(Konrad Zacharias Lorenz, Karl Ritter von Frisch, Nikolaas



図1 高崎山の餌付けされたニホンザル集団（C群、約650頭）

ニホンザルの自然集団としては異常に巨大化した群れではあるが、集団内部の個体間関係などは通常の野生群と変化ないように見える。ただし大量の餌が大きな群れの中心にだけ散布される状況下では、餌をめぐる争いが激化するのとは当然であるが、初めからそのような状況の中に入ろうとしないものも少なからず存在する。その点では自然状態の社会関係とは少々違った側面が見えているかもしれない。

Tinbergen) が1973年のノーベル医学生理学賞を受賞するという快挙によって、行動学Ethologyの生理学的基礎が認められ、動物の行動研究というものが愛好家によるフィクションではなくて科学的な範疇にあるのだというお墨付きを得た時代であったので、当時の私にとって行動学という学問分野は、動物の生活を理解する新たな手段として重宝な思考道具となったのである。

だが、彼らがノーベル医学生理学賞を受賞したということの生物学上の本当の意義は、動物行動というものが生理学的なプロセスとして解読できるということを強調したのであって、個々の行動事象がそれを発現させる個体に対して果たしているところの意味を問うところには繋がっていなかったのである。行動するそれぞれの個体はけっして機械的存在ではない。したがって、動物の行動をホルモンやフェロモンに支配されるものと理解し、神経生理学的運動に還元するという方法だけでは行動の意味を問うところへは行きつけないだろう。水原洋城はそこをエソロジーの還元主義的傾向として批判した（水原，1981；1986；1988）。とはいうものの、動物の行動を観察する研究方法としては、とくに霊長類に関しては直接観察という方法がもっとも手っ取り早いし、わかりやすいような気がするのも事実である。そのような研究方法を生理学的事実が補完してくれるのであれば、実証的な研究は急速に進歩し、新たな理論が次々に登場するのではないのか、というEthologicalな方法への期待感すら生じていたというべきだろう。

ニホンザルを観察するという行為

ニホンザルが生態研究の素材として注目された背景はやや複雑である。そもそも日本列島は東アジアの東端で、太平洋上に孤立的に位置している。氷河期以前からの地史をたどれば、中国大陆といくつかのルートで繋がり、北方地域とは千島、樺太経由で往来があったことがわかっている。太平洋地域からの生物の流入も考えられるが、ここで対象としたい哺乳類にあっては、その可能性は極端に小さく、海獣類があげられる程度であろう。生物地理学上、ブラキストン線として知られる津軽海峡部は、氷河期上の最寒気であった約3万3千年前から2万8千年前の時期には凍結したらしく、ヘラジカなどの大型哺乳類が本州に入ったと考えられているが、それらの種は温暖になってから本州からも北海道からも姿を消した（安田，1987）という。そういう点に注目しつつ、考えていくと、西側の中国大陆、とりわけ南西部からの移動圧を強く受けながら、日本列島で勢力を拡大した哺乳類の代表格の1種としてニホンザルが注目を浴びることとなる。

日本を代表する哺乳類が霊長類であり、しかも複雑雄雌群という社会構成で生活しているということが、次なる注目点であった。戦前から続くいわゆる京都学派の中で生態研究の理論的指導者であった今西錦司は、生態学を究める中で生物社会の論理の中心に種社会という概念を置いた（今西，1940；1949）が、同時に人類誕生の原型を霊長類の進化に求めていたために、種が表現している社会構造を単純な生活上で観察可能なもののみに捉える傾向があった。そのために人間を特徴づける行動概念をそのまま動物社会の中に認めようとするあまり、行動研究本来の意味での観察を結果として軽視し、のちにはそれを継承した伊谷純一郎によって社会構造の本質部分が集団におけるオスあるいはメスの移出入によって決定づけられるという極めて単純化された理解として種における集団を捉える学派を生み出したのである。伊谷純一郎は、観察の重要性をもっともよく理解して行動した研究者であったが、種社会の基本的社会単位BSUの概念によって社会進化の法則を終息させた（伊谷，1972）のである。今西はこれを彼自身の自然観とは相いれないものとして非難したが、そもそもの原因は人間の特徴の起源探しとして霊長類観察研究を矮小化していた今西自身の問題意識のずれであったと、私には思われる。伊谷は次のように記述した。

社会人類学における社会構造の研究は、*Homo sapiens* という種内に見られる社会構造の諸変異と、それら相互の間の系脈を明らかにすることを主題としてきた。それに対して、霊長類からのアプローチは、*Homo sapiens* という種のもつ社会構造の特性の追求を主題にしており、それを、Hominidaeの中に、さらにHominoideaの中に、Primatesの中に、そして自然と時間の中にどう位置づけるかという課題を負わされているのだといってよい。まだ理論的基盤は薄弱なものにすぎないが、どうも霊長類の社会構造を動かしているその回転のシャフトは、インセストの回避機構であるように私には思えてならない。（伊谷，1972『霊長類の社会構造』p. 147）

伊谷はこのように書いた後、彼自身はそのインセスト回避機構の単位としての基本的単位集団BSUの概念によって社会進化の法則を完結させ（伊谷，1987）、人類学におけるノーベル賞と評価される

トーマス・ハックスリー賞（イギリス王立人類学会）を受賞したのである。このころ霊長類学の周辺では、集団遺伝学者たちが「遺伝的有效サイズ」という概念を広げて、ニホンザルの群れを遺伝子集団として単位化しようとする動きもあった。実際に可視的に存在するはずのニホンザルの群れを、「生物的单位として群れなど存在しない」と言っている若い生態学研究者も出る始末であった。新世界ザルのフィールド観察でも、ゴリラの生態研究でも、要はインセストの回避こそが種集団の基本構造を決定するという伊谷のテーゼが前提となった研究がすすめられたのである。これら一連の事態を見た今西はこれを「伊谷は生物学主義に後退した」として非難したが、そもその原因は先述したように、人間の特徴の起源探しとして霊長類観察研究を矮小化していた今西自身の問題意識のずれであったと、私には思われる。

この節で明らかとなったようにニホンザル研究はその紆余曲折の中で、動物学の研究対象としての立場と、人類進化史研究のそれとを両立させながら、当事者たちにはその違いがよく理解されていなかったのではないのか、と私には感じられる。いずれにせよ、日本においては、Ethologyという立場の行動学は十分理解されず、機械論的な生理・生化学主義が生態学を席卷するという風潮だけが残存した。しかし、世界の趨勢は違っていた。そのころ私はパナマのスミソニアン熱帯研究所にいたが、そこには上記の機械論万能主義研究者とともに現場で事実を積み上げる多くの生態研究者がおり、観察事実の積み重ねの重要性を意識させられていたのである。その事実には私は大いに勇気づけられた。

社会性の獲得から共同性へ

ここで私は、ニホンザルの社会なるものに再度定義づけを試みたいと思う。サルにとって社会とはいかなるものなのかということについては、ニホンザル研究の当初からこれまでも何度も論じてきた（たとえば、木村, 1983a; 1990; 2006などを参照されたい）ので、今更の感がないわけでもないのだが、ニホンザル社会論をそろそろ店仕舞いする齢にもなってきたので、この辺でもう一度整理しておこうと考えたのである。

ニホンザルをいろいろな条件下で見続けてきた私にとって、サル社会とは、いったい実体概念なのか、それともサルが個体としては見えているものの、その間の関係性については、私たちが勝手に思いを巡らせているだけのものなのではないのかという疑義が、いまだに若干ではあるけれども付き纏うのだ。学生時代に始めた研究の当初から、サルを客観視することを大前提にしてきたのだが、さて本当に客観的に関係性などというものが見えていたのだろうか。それとも、無意識に操作的感覚でサルを見てきたのではないだろうか。そういう反省に立って、現実のサルにとっての「個の社会性」と「個体間の関係性」というものに立ち向かってみたい。今西にとって、種社会は実体概念であった（今西, 1940）。しかし、彼にとってのそれは、もちろん可視化されるような即物的な存在ではなく、生物界を腑分けするための構造単位なのである。ずっと後になって、川那部浩哉が個々の種社会も種の地域的集合である群集も「関係性の総体」としての社会であるという捉え方をして、生態学を纏めてしまった（川那部, 1996）。その時は、なるほどそういう言い方も出来るのかと感心したのだが、よく考えてみると「関係の総体」というものには内実がない。つまり社会としての具体性がどこにも

認められないのである。今西にしても川那部にしても、自然界を観念的に取り纏めることには長けているものの、実際に目の当たりにする動物の生き生きとした動き（生活といってよいだろう）とそれを概念化した時の表現との間には、超えることのできない断絶というか、意味の不開明さが付きまとうのである。

目の前のサルや個体間の交渉を見ながら、これはいったいどのような社会的意味を持つがゆえに社会的場面であるのか、つまり「ニホンザルの社会って具体的には何なのだろう」ということを明晰に記述できなければ、科学的に表現したことにはならないのではないか。そんなことを考えながら、2017年もまた、高崎山の寄せ場の餌（サツマイモや小麦）にへばりつくサルたちを観察する機会を持ったのである。今回は少々趣向を変えて、寄せ場の中心から少し離れたところで、どっちにしても大して餌にありつけないようなサルたちをターゲットにして、3日間ついて回ることにした。観察は2017年3月3日から5日にかけて行われた。高崎山のサルは1952年の餌付け以来、個体数を増大させ続け、何度も分裂を繰り返した挙句に集団捕獲されて、現在ではB群とC群の2群合計で1400頭ほどを数える。ニホンザルとしては他に類を見ないほどに大きな群れではあるものの、観察してみるとやはりこれは群れとしか言うことが出来ない。とはいうものの、その広がり是非常に大きく、遊動中も、おそらく声は届くものの、互いに姿を見ることがない個体が小集団として散在しているのであろう。群れが寄せ場で採食する時間帯を狙って、そのような周辺部の小集団を観察することにしたのである。

この小集団（図2）を見て、最初に疑問を持ったのは、いったいこの1歳の母親はどこにいるのかということであった。ニホンザルのこどもは3か月を過ぎるころから離乳を始め、6か月くらいになるといわゆる乳離れをし始めているので（もちろん母親と一緒にいるときはずいぶん長く母親の乳房



図2 高崎山C群。中心から離れてくつろぐ小集団

群れの中心から100mほど離れた他のサルたちからはあまり見えない場所でくつろぐサルたち。

手前左の成熟したオスから、左手奥で毛づくろいをする3-4歳の未成熟個体（毛づくろいをしている方がオスで、それをうつ伏せで受けている方がメスのようだ）、一番右にいるのはまだようやく1歳だが性別は不明であり、その左側のメスはどうやらこのこどもの姉（4歳か？）にあたるメスのようである。どう見ても母親ではなさそうだ。

に吸い付いているものも多いが、栄養的にはほとんど意味がない)、1歳のこどもが数時間にわたって親から離れているという状況も必ずしも不思議ではない。さらに、このこどもに対して、時折目をやり、こどもが動くと、少しにじり寄り、しかし身体との接触はしない若年のメス（私は姉だと想像したのだが）が存在していることで、こどもの方もリラックスしているようだ。

さて、いわば群れの周辺に位置しているこのような小集団を観察して、何が得られるのだろうか。通常の観察研究では、群れの主たるメンバーが繰り広げる大きな社会変動すら引き起こしかねない個体間の関係を彷彿とするようなやり取りを記録し、集団内で生起する社会行動から社会構造の本質をつかみ取ろうとするものである。ところが、ここでは群れの周辺にぼつねんと座るオトナオスと年少の個体が穏やかに過ごしている情景しか見えては来ない。別府湾の寒風にさらされながら、じっと何時間も観察したくなるような場面では絶対にはないだろう。だから、サル研究者は誰もこんなところで生起する行動の社会的意味などは、ほとんど何も知らないのだ。そこがこの調査の眼目であった。ニホンザルの生活は、いつもドラマティックに展開されているわけではない。毎日の大半は何事もなく、誰とも大した社会的交渉を持つわけでもなく、かといって一人孤独に過ごしているというようなものでもない。そのような感覚を想像しながら、対象と対峙することもまた観察者としては必要なことなのだ。もっとも、毎度毎度そのような観察をしていたのでは、フィールドノートは埋まらず、データの蓄積はわずかなものになるから、論文にはならないかもしれない。私のように、明日の論文が業績にならねば研究者として失格してしまうという状況にはない（いや、すでに失格しているのかも）からこそ、このような場面での調査をあえて行おうというのである。

いよいよこの章の本論に入ろう。

通常のニホンザルの野生群では、個体数が20-30頭から多くても100頭程度である。日本の森に野生群しかいなかった時代には、実際はもっと小さな群れが多かった可能性も考えられるが、私が調査を始めて以降のおよそ50年の間、極めて大きな群れの大半は餌付け群であって、小さな群れが屋久島などで知られている程度で、ほぼ上記の範囲に入っていた。1980年代以降の里山あるいは人家周辺に現れるようになった群れを見ると、実はもう少し小さな個体数で纏まっていることが少なくない。私は愛知県新城市北部地域や岐阜県飛騨郡朝日村（現在は高山市）などで猿害調査の一環として、サルの群れの分布と個体数を調査してきたが、いずれもひとまとまりの群れとしては30頭以下という事例が多かった。さて、このような実態をどのように理解すればよいか。一つには野生状態での個体数確認の難しさで、測定出来ていない部分があるということが十分に考えられる。しかし、私自身の経験からいえば、群れのまとまりは一時的にせよ、長期的にせよ、比較的容易く少数の分裂群に分化するかもしれないということを考慮する必要がある。ニホンザルの強固な群れの集合という観念は餌付けされた群れの二重同心円的な個体配置から推測されたもので、森林内を遊動する群れではしばしば小集団への分化が認められる。この両者の関係の子細に見なければ、群れとしての行動のシンクロナイズは確定的なものとはならない。群れのコンパクトなまとまりと強固なつながりを、私たちは種集団の固定的な基本単位だと見做してしまう。しかし、実際にはもっと緩やかなつながりで集団は構成され、互いに相手の居場所を相対的に認識しながら、それぞれは勝手な位置に止まっているということなのではないかと考えられる。その結果として、図2のような構造的に不安定な個体の集まりが

形成されるのである。そう考えると、群れの中の個体間および小集団における集まり方というものの様相が垣間見えてくるのではないか。

そこで、あらためて問題となるのが、個体の成長過程における社会性の獲得という問題である。かつて私が記述したように、群れの中で生まれたあかんぼうは、母親との絶対的で特殊な関係によって庇護され、成長していくが、その過程は、同時に個体としての独立のプロセスでもある（木村，1983b）。この独立過程として重要なのが、集団の中心における「保護し—保護される」関係性ではなくて、無視され、干渉され、時には敵対されるような環境なのではないか、ということをも、最近になって思いついた。個体が個体として独り立ちするということは、他者との関係性を当事者自身が感知し、確認する必要がある。そこでは「頼り—頼られる」ような関係（伊澤，1982）は問題とならない。もちろん同種で、同質の群れの中の個体同士であるから、初めからコミュニケーションが成立しないはずはないが、直ちに分かり合える関係でもない。そのような関係性を乗り越えなければ、個体性の確立は望めないのである。

図3では、寄せ場の中央で、群れの最優位なオスとそれに随伴する高順位のメスが同時に採食している横から、彼らを見上げながら、半分逃げ腰で自分も餌の分け前にあずかっているこども（1歳？）が認められる。この個体は奥で採食しているメスの子ではない。ここで、このこどもの代わりに成熟したオスなどが堂々と座っていれば、優位のオスとその動きに乗じる他のメスやその他多くのサルに攻め立てられ、おそらく逃げ出すしかないであろう。ここではまだこどもであるということが、相手の攻撃性を弱め、目障りでない限り随伴して食にありつけるわけである。しかし、そのようなことがいつも起きるほどこの中心部はすべての個体にとって平安ではありえない。むしろ図2で見たように、



図3 群れの主たるメンバーとこどもとの関係



図4 こどものマウンティング

左図は2.5歳同士の馬乗り行動で、性行動と全く同一姿勢で、上の個体はスラストを伴った行動をしている。下の個体もまた、姿勢あるいは上を見上げるポーズなど、性衝動を伴っているかのように見えるが、性的というよりは遊びの要素が勝っているものである。

他の目を気にすることなくゆったりとする空間が群れの周辺には広く存在しているのである。

図4は擬似的な性行動を行うこどものサルの様子である。写真説明のように、こども同士の遊びの要素の強いものもあるが、右の写真のように、明らかに若いといえども成熟したメスに対して交尾姿勢をとるオスのこどももいるのだ。この写真の場合にはメスは明らかに弱いながらも発情の兆候を示していたので、このシーケンスはおおよそ20分にも及ぶものとなった。ただしオスのこどもの方はいえ、発情とは程遠い遊びの繰り返しであったように見えた。これらの観察を通して言えることは何か。

社会性は個性性の発露である

ここまでの観察と議論で、ニホンザルの個性性が社会の中で置かれた状況を反映していること、それは何も多くの個体に取り囲まれて仕込まなければならないというものではないことなどの諸点が浮かび上がってきた。私たちは社会性という言葉の字義どおりに解釈するあまり、サルの個性性の発達においても、他の個体とどれくらい接触するかという頻度で、その成否を理解しようとしてきた。しかし、初期の行動学（Lorenz流のEthology）が示唆するところによれば、行動の発現にはそれに先行する経験の頻度などは必ずしも必須の条件とはならないのである。不可欠なのは、前提の状況を少なくとも何度か経験し、獲得することで、個体は次の社会的ステップへと進むことが出来るのだ。もちろん、高崎山のサルのこどもであっても、あの大きな集団の中で、孤立することなどありようないから、必要十分な経験が彼らの社会性を保障しているに違いない。それ以上に大切な条件は、個体が個体として生きるということであって、あえて言えば、サルにだって「ego」のようなものを認めてもよいのではないか。多くの時間を個体として意図的に生きる者こそ、社会性に満ちた存在となるのだ。

社会性と共同性

人間社会における「共同性」は個体の他者認知を前提とする。ニホンザルの場合にはどうだろうか。霊長類全般を考えてみても、単独生活者である原猿類などをも含めて、おそらくすべてのサル類には他者認知の能力がある。この場合には、それは自己認知能力でもあるだろう。自己を確立するということを、私たちは何やらとてつもなく高度な行為のように考えがちだが、それは高等動物一般に備わった行動上の本質であり、しかし、霊長類にはとくに他者との社会的な関係において、そのことが重要視されるのである。それは霊長類の集団の作られ方に関係することなのだろう。サルの社会を研究する研究者の大半は、社会というものを個体の相互的な関係の全体として捉えている。それは誤っていないのだが、本当にここで問題となるのは相互的とは何かということなのかも知れない。

かつて私は、クモザル社会の研究において「クモザルはさよならを言わない」というような発言をしたことがある（木村，2000；2006）。今回問題としているニホンザルの事例ではないのだが、少々長い引用をお許し願いたい

クモザル社会では基本的には個体が集まって全体の群れになるということにはなさそうで、いくつかの小さなパーティーが集まってひとつの群れになる。ではその小さなパーティーはいたい何かということをつきとめる必要がある。小さなパーティーは基本的には母と子の集まりです。ひとつの地域に母と子の集まりがいくつかある。とくにアカンボウのいる母親同士はくっつきやすいという一般的な傾向があって、アカンボウがたくさんいる群れ、あるいはたまたまアカンボウがたくさんいる時期には大きなパーティーがしやすい。そうでないときには小さなパーティーにばらけている。私が観察していたマカレナのMB-2群という集団では、1998年に見たときにはバラバラの群れだったのですが、2000年に見たときには毎日のようにほとんど全頭数がある、というようなパーティー構成の違いが見られました。

これをひとことで離合集散と言いますが、離合集散というのは離れたりくっついたりすることで、離れたりくっついたりすることに社会的な意味があるというのですけれど、クモザルを見ていまして変だなあと思ったことがひとつありました。クモザルの群れは多くの場合、夜明けごろには小パーティーにばらけていて、その後移動しながら鳴き交わしつつパーティーがくっついてだんだん大きな集団になっていくんです。そのときには非常に頻繁にさまざまなあいさつ行動をする。まず呼び交わしをやりますね。ロングコールと呼ばれる声を上げてだんだん近づいてきますね。ごく近くに来ますと馬のいななきのような「ヒヒ・ヒ・ヒーン」という声を出します。この声はわりあい近接した状態でのコミュニケーションに使われているとカーペンター博士などが記録している音声です。そういうふうにながら近づいてくる、あるいは相手の肩をたたくとかですね。それを見てクモザルの研究者は、クモザルはチンパンジーのようにあいさつ行動が非常に発達しているといっていたわけです。

午前中に大きな集団になって、おそらくこれは採食集団ですけれど、それが採食と休憩を繰り返すうちに気がつくとかだんだん群れのサイズが小さくなっていくんです。ずいぶん遠くに行っ

てしまうやつもいるのだろうけれど、大半はそんなに遠くはなれているわけではなくて、けれども少なくとも周りには他の個体や小パーティーがいない。だから翌朝になると、また「どこにいるんだい？」ということをやらなければいけないわけです。そのときに気づいたのは、出合いの時には非常に頻繁にあいさつをするにもかかわらず、クモザルはさようならといって別れていかないのです。それはいったい何だろう。離合集散というと「離」と「合」が対等のように言っていますが、「離」と「合」は違うのだ。つまり、物理的に離れていくことは彼らにとって心理的に離れていくのではないのだということなのかもしれません。逆にいうと、さよならをいわないことが大事なのではなくて、彼らが出会うときだけ特殊なあいさつ行動をするということに意味があるのではないだろうか。そのことは、見かけ上あるいは物理的に離れた状態であっても彼らは群れというものをきちんと認識していることのある種の表われではないだろうか。

チンパンジーって別れのあいさつをするのでしょうか。まあ、そもそもそういう関心を持って見ている観察者などおそらくいないので、チンパンジーでも出会えばかり見ているのではないのでしょうか。でも離れることの意味が分からないと出合いの意味も本当には見えてこないのではないかという気がします。チンパンジーでも出合いの行動ばかりが観察されている。群れの中の社会関係・個体関係についていえば、社会的に距離をおいていくプロセスというのは、ひょっとしたら大切なのではないだろうか。そのところをすっとばしてチンパンジーとクモザルが似ていると言ってしまうのはちょっとまずいかなと思います。

出合いのときは個体同士が接触する場面だから緊張状態が生じるわけですね。そこで何らかの相互作用が起こる（つまりあいさつが発生する）ということはよく分かるけど、離れていくときにはその個体が離れることに踏み切れば、積極的に離れる場合もそうでない場合もあるだろうけど、そのときに「さようなら」を言わないのは至極当然なような気がします。少なくともクモザルが別れていくときには意図的ではないんでしょうね。結果として別れている、気がついたら別れておった、ということなのかもしれない。ではクモザルでは離れていくやつを追うとかいうことはぜんぜんないのだろうか。別れてしまうことを止めるために声で呼び合うことはあるようだ。しかし、そのときに別れて行くと決めた個体は返事しないんです。別れるときはお互いに気を使わない。接近すると気遣いせざるを得なくなる。離れていくときは別に何とも思わない。でも別れたくないやつもいるんですよ。そのときには別れたくない方がフォローするでしょう。そのときに一生懸命声で呼ぶんですね。そういう気分になつてはなっているわけです。一方、別れてもかまわないと思ったような個体は声を出さない。だからきわめて近くにいるのに、片一方は分かっているけど、もう片一方はそいつがどこにいるか分からない状況を結果として作り出してしまうんですね。それでもクモザルはサーチング（探索）という行動をほとんどやりません。

（木村，2006，一部改変）

クモザルの社会構造はニホンザルのそれとは相当に異なっているので、このような事例を示しても、ニホンザルの社会性と共同性を繋ぐ理屈としてはちょっと適切でないとも考えることも可能である。し

かし、私は、このような他種の事例を積み上げることによって、ニホンザルの真の共同性に迫ることが出来ると考えている。

図5は高崎山C群が寄せ場で餌をもらっている時間帯に周辺の森を歩きながらサルを探していた時に見つけたものである。この高齢のメスは、乳房の形状から見ても何度もあかんぼうを生んだことを示している。これまでの履歴は不明だから、いつも集団の外れで生活していたのかどうかは明らかではない。しかし、群れの辺縁は他集団あるいはハナレザルとして移動しているオスザルとの接触頻度が高い場所でもあり、社会的交渉が著しく少ないわけでもない。このようなところで生まれたあかんぼうも、図2の場面におけるサルたちと同様に、それなりの社会的接触を多数のサルたちと交わしてきたことだろう。共同性というのは、人間社会でいうところの共同作業とは意味合いの違うものである。もちろん人間の共同作業もヒトという生物種がもつ共同性に支えられているのだが、サルは物理的な意味での共同作業はしない。むしろニホンザルの場合には、なんとなく一緒にいるということの中に共同性を認めることが望ましいような気もする。

どんな生物でも、他者との関係を取り結ぶためには具体的な行動が不可欠である。しかしその行動が常にポジティブな関係形成を目指したものであるとは限らない。さらに、行動はその個体の心的内的状況を反映するのだから、そのような状況をもたらす空間的な位置とそこにある他者への関係性こそが社会性である。それは共同性とイコールのものではないのか。クモザルは「さよなら」を言わなけれど、その出会いと別れの非対称的世界のなかに、彼ら独特の共同性が見いだされるのである。



図5 群れの外れにいるオトナメス

高崎山C群の中心からおおよそ300m離れた集団の最外側で単独で行動している高齢のメス。このような個体が周辺部には相当数いるようで、互いに近接し、時には毛づくろいなどをすることもある。

ニホンザルもおそらく同様だ。これまでの社会論で、おとなとこども、多くの場合には母と子という関係で社会性の側面を見てきたけれど、現実のサルは群れが持つ広がりという空間的構造の中で、自由に、時には擬人的には「絆」にも見える社会的な関係をもつ共同社会を形成していたのだということが出来るだろう。

その形態にも行動要素にもプリミティブな特徴を残存させている原猿類、とりわけ単独生活者たちを除けば、ニホンザルのような複雄複雌群あるいはマントヒヒやゴリラに典型的にみられる1頭のオスが複数のメスと形成する群れという形式の集団であれ、オス・メス1対から構成されるペア型であれ、霊長類の社会集団の基本特徴には大きな相違はないと、私は考えている。この点には異論も多いだろう。むしろ、そのような集団構成の違いこそが霊長類内における種進化のプロセスそのものだと考える研究者が大半なのかもしれない。私が「大きな相違がない」と考える根拠は、2個体間の相互的關係が強弱の固定した関係であっても、相互融和的であっても、それ以外の関係性（霊長類の場合には具体的に提示するものが見当たらないのだが）で繋がれていても、そこに集団を維持する共同性の原則は貫かれている、と考えるからである。普段はそのような共同性について、ほとんど注意を払って観察するなどということはないけれども、それは共同性が形として見えないからに他ならない。その代わりに、私たちは社会的行動の記述を通して関係性を理解しようとしているのである。そうだとすれば、種特異的な社会性のあり方こそが、当該種の現在の社会的な構造を指し示す指標として有効なのであろう。しかしそれは、けっして種の進化を順序づけるものではあり得ない。少なくともチャールズ・ダーウィンは現生種の生態的特徴をそのまま比喩的に比較して種の変遷を論じたりはしなかった。私たちも、そのような自制的努力はするべきだ。そういった視点で、私は、社会性というものが種の個体間を結びつけ、種を構造的実体として存在ならしめている生物的特性であると考え、その具体的な関係性から導出されるその種の生活史的特性として共同性という概念を用いたいと考えるのである。

参考文献

- 今西錦司, 1940. 『生物の世界』
 ———, 1949. 『生物社会の論理』
 伊谷純一郎, 1972. 『霊長類の社会構造』生態学講座20, 共立出版.
 ———, 1987. 『霊長類社会の進化』平凡社.
 伊澤紘生, 1982. 『ニホンザルの生態—豪雪の白山に野生を問う』どうぶつ社.
 Izawa, K., K. Kimura and S. Nieto, 1979. Grouping of the wild spider monkey. *Primates*, 20(4): 503–512.
 川那部浩哉, 1996. 『曖昧の生態学』自然選書, 農山漁村文化協会.
 木村光伸, 1973. 白山のニホンザル. モンキー, 17(5):
 ———, 1978. 下北A群の個体数変動. 「ヒトとサル共存の道——最北限のニホンザルの保護に関する中間報告」
 (協之沢村教育委員会〔青森県〕)
 ———, 1983a. ニホンザル研究における諸問題. 名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇), 19(2): 33–50.
 ———, 1983b. ニホンザル未成熟個体の社会的行動——生後6ヶ月未満における攻撃的行動の発現と発達. 日

高敏隆編『動物行動の意味』東海大学出版会.

———, 1990. サルの社会性と個性——ニホンザルの社会的発達の事例から——. 『新釈どうぶつ読本』JICC 出版局.

———, 2006. 霊長類社会論をめぐるモノローグ. 名古屋学院大学研究年報, 19: 29-43.

木村光伸, 荻野和彦, 1972. 幸島群の遊動について, 「幸島のニホンザルの保護に関する研究会(京都大学霊長類研究所)」(1972, 10. 口頭発表).

メドウス他, 1972. 『成長の限界——ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社.

水原洋城, 1981. 『ニホンザル行動論ノート』どうぶつ社.

———, 1986. 『サル学再考』群羊社.

———, 1988. 『猿学漫才ーニホンザル, 人間を笑うー』光文社.

安田喜憲, 1987. 『世界史の中の縄文文化』雄山閣出版.